

タイトル：「間主観性」再考 ―日本語の「そういえば」をケーススタディに

要旨：

本稿の目的は、歴史語用論の中で提唱されてきた「間主観」という概念を批判的に検討することである。これまで Traugott (1982, 2003, 2010)を中心に、「客観的な意味>主観的な意味>間主観的な意味」という傾向が言語表現の意味変化に見られるとされてきた。

(Traugott and Dasher, 2002; 高田・椎名・小野寺, 2011)だが、間主観的な意味が主観的な意味だけを基盤に成立するのかは、定かではない。そこで、「そういえば」という表現を事例に、客観性の強い意味からでも、間主観化が見られることを指摘し、主観化と間主観化は、別の軸に存在する変化である可能性を指摘する。

第一に、本稿は、「間主観性」の定義を議論する。言語表現の中には、聞き手の自分自身で抱いているであろう見方や信念に注意を払う表現がある。例えば、聞き手が抱いているであろう面子や自己像を慮る敬語などである。このような他者配慮を、Traugott は、「間主観性」と呼び、このような他者配慮を実現するため「比較的中立的な、または主観的な表現」が使われることで、言語表現の意味それ自体に他者配慮性が宿ることを「間主観化」と呼んでいる。(トロウゴット, 2011: 66) 他方、ポライトネス理論を深く意識して「間主観性」の幅を狭く提唱した Traugott に比べ、より広く「主観化を基盤にして、さらにコミュニケーション(相互作用)の中で用いられる機能・意味を帯びていく変遷」を「間主観化」と呼び、「コミュニケーションの中での、話順取り (turn-taking)」を主張するような機能を備えるようになる変化をも、間主観化に組み入れて考える研究者もいる。(小野寺 2011: 81) ここで、問題になるのは、主観性表現が「他者配慮表現」になるとする狭く定式化と、主観性表現が「コミュニケーション指向表現化」という広い定式化のどちらが適切か、あるいは、どちらも不正確であるのか、という点である。

この問いを考えるために、第二に、本稿では、日本語の「そういえば」の意味変化を考察する。「間主観性」は、「検証可能な強い仮説」(トロウゴット, 2011: 70)であるので、事例に照らして精査することができるためである。「そういえば」には、構文性の違いにより、少なくとも、二つの多義性が存在する。一つ目は、思い出しという表出機能を備えた構文である。例えば、一人で歩いている時に雨雲を見て、「しまった、そういえば洗濯物干しっぱなしだった」と言うときの「そういえば」は、「*{私/君/雨雲/洗濯物/それ}がそういえば」のように主語をつけることもできず、また、誰も「言っ」ていない時にも用いられることから、構成素の意味に還元できない、分析性を失った、一つの構文 (cf. Goldberg, 1995; 山梨, 2009) だとみなすことができる。しかし、「そういえば」には、構成素の、表現全体への貢献度が比較的高い二つ目の用法がある。例えば、「そう言えば許してもらえてたと思うよ」における「そう言えば」は、文脈指示の「そう」、発言する意味の「言う」、仮定を表す「ば」という構成素の意味からの予測が、比較的容易である。一般的に分析性の低い表現は、分析性の高かった表現が誘導推論など経て、語用論的な意味を取り入れ成立すると

考えられることから、二つ目の用法から一つ目の用法が生まれたはずであり、話し手の独自にも登場し、話者の感情表出が反映されている一つ目の用法は、主観化を経た表現だと考えられる。

しかし、第三に、このどちらの用法からも間主観的な用法が見られることを指摘する。話し言葉、書き言葉の調査から「(思い出したかのように繕って) そういえば昨日が、帰りが遅かったようだな」と唐突な話題導入を避ける緩衝材的表現(既主観化表現からの間主観化)だけではなく、「(相手の顔を立てて) そういえばそうだねえ」と同意する表現(未主観化表現からの間主観化)が見つかった。第二の議論から、「そういえば」で確認された、未主観化、既主観化のどちらの両用法からも間主観化が観察される以上、第一の議論で議論した二つの味方のうち、より狭い定式化である Traugott の見方でさえ、主観化表現が間主観化する、と主張している点で不正確である、と結論付けられる。

この三つの議論から「客観>主観>間主観」という一直線的な図式ではなく、「客観>主観」、「客観>間主観」、「主観>間主観」という主観化と間主観化を独立させた記述が必要である可能性が指摘された。類例の検証が必要であるが、談話において話し手がどのような聞き手配慮を行うのか、それに主体性はどう関わるのか、という談話運営、主観的認知を考察する上で、字面上の近似性とは裏腹に、主観化と間主観化は異なる変化の軸にある、別の質を持つメカニズムだという指摘は意義深いと考える。

引用文献：

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Traugott, Elizabeth Closs (1982) From propositional to textual and expressive meanings: Some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In *Perspectives on Historical Linguistics*, Winfred P. Lehmann and Yakov Malkiel (eds.), 245-271. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.

Traugott, Elizabeth Closs (2003) From subjectification to intersubjectification. In *Motives for Language Change*, Raymond Hickey (ed.), 124-139. Cambridge: CUP.

Traugott, Elizabeth Closs (2010) (Inter)subjectivity and (inter)subjectification: A reassessment. In *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens (eds.), 29-71. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: CUP.

小野寺典子 (2011) 「談話標識 (ディスコースマーカー) の歴史的発達—英日語に見られる (間) 主観化」『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) 大修館書店, 73-90.

高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) (2011) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーション』

ンを復元する』大修館書店.

トロウゴット, エリザベス・クロス [訳 福元広二] (2011) 「文法化と (間) 主観化」『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) 大修館書店, 59-70.

山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』大修館書店.